

ポスト子育て期女性のアイデンティティ再体制化に関する研究

兼田祐美・岡本祐子

The investigation of women's identity reformation on the post child-rearing stage

Yumi Kaneda and Yuko Okamoto

本研究では、ポスト子育て期女性のアイデンティティ再体制化のプロセスを検討することを目的とした。研究Ⅰでは、数量的尺度を用いて、アイデンティティ変容の特徴を分析し、研究Ⅱでは、半構造化面接によって、アイデンティティ変容のプロセスを検討した。その結果、子どもの成長とともに巣立ちを母親自身が認識することが、アイデンティティ変容に影響を及ぼし、巣立ちの進行と同時に自己の問い直しと模索が進んでいくことが明らかとなった。また、子どもの巣立ちに対する空虚感の程度には、母子分離の作業を行う時期が影響することが示唆された。

キーワード：中年期、アイデンティティ、ポスト子育て期、子の巣立ち、女性

問 題

近年、女性をとりまく社会状況の変化により、女性のライフスタイルは多様化している。女性の社会進出も増加しており、女性が職業を持ち続けることは当たり前のこととなっている。このような女性のライフスタイルの変化により、女性の標準的ライフサイクルは大きく変化した(井上・江原, 2005)。少子化により末子の就学が早くなり、さらに、寿命の伸びにより老後が長くなっている。そのため、子育てを終えた後の期間が延長し、現代の中年期の女性にとってこの期間をどう生きるかということが1つの重要な問題である(杉村, 1995)。

人間の発達を生涯に渡るものとして捉え、初めて理論化を試みたのはErikson(1950 仁科訳 1977)であり、その中心概念としてアイデンティティが挙げられる。アイデンティティについて、Erikson(1950 仁科訳 1977)は、ある特定の社会的現実の中で自分とは何であり、どのように発達していこうとしているかの確信の感覚と定義し、その感覚は具体的な他者との関係の中で確認されるとしている。また、アイデンティティの獲得は、青年期の課題であるものの、青年期以降も様々な心理・社会的変化を契機に問い直され、再吟味されて、さらに成熟していくものである。岡本(1985)は、中年期の心理的变化の特徴として、“身体感覚の変化”，“時間的展望のせばまりと逆転”，“生産性における限界感の認識”，“老いと死への不安”，“自己確立感・安定感の増大”の5つを挙げている。このような心理的变化の中で、中年期にはアイデンティティの問い直しが起こる。岡本(1985)は、このプロセスを4つの段階で説明している。まず，“I 身体感覚の変化の認識にともなう危機

期”があり、次に“Ⅱ自分の再吟味と再方向づけへの模索期”が訪れる。その模索によって、実際に価値観や生活が変化していく“Ⅲ軌道修正・軌道転換期”を経て、“Ⅳアイデンティティの再確立期”へ至る。このプロセスを岡本(1985)は、“中年期のアイデンティティ再体制化のプロセス”と呼んでいる。さらに、この4段階のプロセスの体験のされ方によって、8つのアイデンティティ・ステータスを見出している(岡本, 1985)。

中年期の臨床的問題の1つに、子育ての終了による危機が挙げられる。Deykins(1966)は、子の巣立ちが母親にとって重大な危機であるとして、これを“空の巣症候群”と命名した。“空の巣症候群”には、台所に立つとめまいや吐き気、頭痛などがおきて、炊事が手につかなくなる“台所症候群”、中年から飲酒を始め急速にアルコール依存に陥る“キッチン・ドリンカー”なども指摘されている(井上, 1992)。

一方で、このような“空の巣症候群”は、一般にはあてはまるものではないという異論もある。後山(2002)は、“Deykinsは、臨床群の中老年女性を対象としているため、これを一般化するのは無理がある”と述べている。また、子育て中には抑うつ的な混乱や迷いがあるが、子の巣立ちによって親役割から解放されていく中で、それらの混乱は徐々に解消され、アイデンティティの中核が揺るがされるような経験はされないとする研究(清水, 2004)もみられる。

子の巣立ちを上手く乗り越えるための要因の1つとして、スムーズな役割の改編が挙げられる。これまでもっていた地位や役割の喪失にともなう、今ある地位や役割の見直しを図ったり、新たな地位や役割を加えたりと、地位・役割の改編ができるかがこの時期の重要なポイントといえる(石川・山下・大石, 2000)。これは、母親役割に代わって、仕事、趣味や学習活動、ボランティア活動に役割を転換していくことと言い換えることもできる。岡本(2002)は、家庭中心の生き方を送ってきた女性が、子どもの成長にともなう、より積極的に社会とつながりをもつ生活へ転換していくことは、中年期の危機を乗り越えるために重要であると述べている。さらに、Gonzalez(1990)は、ポスト子育て期にアイデンティティ達成型の人は、他のステータスの人と比較して、生活に大きな変化があることにより生活満足度が高くなり、そのことがアイデンティティ・ステータスと関連しているとしている。それに対し、拡散型の人は、生活の変化が少ないと感じているという。子の巣立ちという転換点において、うまく役割を再編し生活を変化させていくことが、アイデンティティの再体制化において重要な意味を持つと考えられる。しかし、一方で、役割の再編を試みるものの、自分らしい活動や生き方がみつからず、積極的に打ち込み、充実感の得られる対象や体験を持つことができない場合もある。これを岡本(2005)は“漂流するアイデンティティ”と呼んでいる。“中年女性の自分探し(石川・山下・大石, 2000)”は、アイデンティティの再体制化において重要な意味を持つが、同時に困難な面も兼ね備えているといえよう。

また、入村(2005)によるポスト子育て期女性の抑うつレベルの違いによるTAT研究からは、ポスト子育て期の女性にとって、過去へ固執せずに子の巣立ちを認め、未来へ強く前向きに生きる姿勢が大切であることが示唆されている。さらに、子育てをやりとげたことへの満足感をもつことも重要な要因であり、ほどよい母親として子どもとの心理的距離を保つことにより子どもの精神発達を促すことは空の巣の危機に陥らないための1つの手段であると後山(2002)は述べている。同様に清

水(2004)も、子どもの自立を肯定的に受け止め、子育てへの達成感を持っている人の方が、自身のアイデンティティの課題により取り組んでいるとしている。そして、自分の興味・関心がどこにあり、自分の能力がどれほどであるか、何を伸ばしていくべきであるかといった、自己への対峙や、自分らしい生き方への主体的な模索、選び取った生き方への積極的関与が不可欠である(岡本, 2002 ; 国眼, 1999 ; 伊藤, 1999)。母親役割に固執せず、子の巣立ちを積極的に受け止め、未来へ目をむけて自己の問い直しを行い、母親役割以外の自分の役割、特に社会の中での位置づけについて主体的に模索し、積極的に関与していくことが重要となるのであろう。

このように、子の巣立ち後は母親にとって危機として体験されるか否か、子の巣立ちをスムーズに乗り越えるための要因は何かといった研究は、これまでに多くなされている。しかし、子の巣立ちによって、どのように自分自身を問い直し、どのようにアイデンティティの質が変化していくのか、そして、どのように自分自身を模索するのかといった、子の巣立ちからのアイデンティティ再体制化のプロセスに関する研究はまだ行われていない。そこで本研究では、岡本(1985)の研究を基盤として、子の巣立ちに焦点をあて、子の巣立ちによるアイデンティティ再体制化のプロセスを検討することを目的とする。

渡邊(2004)は、社会的文脈の中で生きるリアルな人間は、変化していくことが自然であり、その変化自体を研究対象とすることが質的研究であると述べており、プロセスという変化を捉える上で、質的研究を行うことの重要性を示唆している。難波(2000)も中年期の一般的女性について研究する上で、“個々に切り離された特定の側面や要因についての量的研究ではなく、具体的文脈の中のあるがままの人間像・生活像を捉え、女性の内的発達のプロセスを質的に記述する必要がある”と述べている。よって、本研究では質的研究法を用いることとする。その中でも特に質的面接法を用いる。質的面接法は、個人の主観的な観点から経験の意味づけや人生の様相を捉えるというものである(徳田, 2004)。人生における人の発達のプロセスやその特質を解明していくためには、特定の領域のみに焦点を当ててとらえるのではなく、個々人のあり方を包括的に、全人格的に捉える必要があるため、そのためには綿密な面接による研究が必須である(難波, 2000)。一方で、量的データは質的データよりも、よりサンプルの代表性が高いとも言われており、質的データと量的データを相補的なものとして捉え、質的方法と量的方法を組み合わせて研究を行うことの重要性も示されている(Flick, 1995 小田他訳 2002)。

そこで本研究では、研究Ⅰにおいて、質問紙を用いて子の巣立ち段階におけるアイデンティティ変容の特徴を捉え、研究Ⅱにおいて、面接調査を行うことによりその変化のプロセスをさらに詳細に捉えることとする。

研究Ⅰ

1. 目的

子の巣立ちによるアイデンティティ変容の特徴を数量的尺度を用いて明らかにする。

2. 方法

(1) 調査対象者

40歳から65歳の女性を対象とした筆者の知人を通して調査依頼を行い、郵送法により回収をした。154名回収したが、対象としている年齢にあてはまらない6名と、全体の1割以上未回答の項目があった1名を除いた計147名を調査対象とした。本人平均年齢は52.56歳($SD = 4.62$)、長子の平均年齢は25.96歳($SD = 4.60$)、末子は22.37歳($SD = 4.50$)であった。分析対象者が最も積極的に取り組んでいる仕事・活動として選択したものは、家事32名(21.8%)、フルタイム43名(29.3%)、パート・アルバイト22名(15.0%)、自営業11名(7.5%)、ボランティア17名(11.6%)、趣味18名(12.2%)、その他4名(2.7%)であった。

(2) 調査時期

2007年5～12月。

(3) 調査内容

以下の内容からなる質問紙調査を実施した。

- ①谷(2001)による「多次元自我同一性尺度」:「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「心理社会的同一性」(各5項目)を表す、合計20項目からなる。回答は、「非常に当てはまる」、「全く当てはまらない」を両極とする7段階での評定を求めた。
- ②桂・佐々木(2006)を一部修正した子の巣立ちによる空虚感を問う項目:合計6項目からなり、「よく当てはまる」、「全く当てはまらない」を両極とする5段階での評定を求めた。
- ③清水(2004)による「子の巣立ちに対する母親の主観的認識」を問う項目:長子と末子ついて「お子様は、すでにあなたのもとを巣立って独立したという感じがしますか」と尋ね、「ずっと前からそう思う」、「最近そう思う」、「まだ先のことだと思う」、「わからない」のいずれかで回答を求めた。
- ④子どもの生活に関する項目:子どもの年齢、性別と、子どもの客観的自立の程度として、同居かどうか、就職しているかどうかについて、合計4項目について回答を求めた。
- ⑤回答者の属性:母親本人の年齢と最も積極的に取り組んでいる仕事・活動(家事、フルタイム、パート・アルバイト、自営業、ボランティア活動、趣味の活動、その他のいずれかを選択)を尋ねた。

3. 結果

(1) 「子の巣立ちに対する主観的認識」に基づいた対象者の分類

母親の子の巣立ちに対する主観的認識の結果に基づいて対象者の分類を行った。長子・末子ともに子の巣立ちを「まだ先のことだと思う」と答えた人、もしくは、どちらかが「まだ先のことだと思う」と答え、どちらかは「わからない」と答えた人を「未巣立ち群」とした。長子・末子のどちらか、もしくは、ともに「最近そう思う」と答え、「ずっと前からそう思う」は選択していない人を「巣立ち感じ始め群」とした。長子・末子のどちらかについて「ずっと前からそう思う」と答えた人を「巣立ち途中群」とした。長子・末子ともに「ずっと前からそう思う」と答えた人を「巣立ち完了群」とした。長子・末子ともに「わからない」と答えた4名は分析からはずしたため、分析

対象者は 143 名であった。Table 1 は、子の巣立ち段階における本人・長子・末子の年齢を示したものである。本人年齢と長子年齢に関しては、未巣立ち群 46 名、巣立ち始め群 61 名、巣立ち途中群 21 名、巣立ち完了群 15 名の平均と標準偏差を示している。末子年齢に関して、12 名の調査対象者は子どもが 1 人であったため、未巣立ち群 42 名、巣立ち始め群 55 名、巣立ち途中群 21 名、巣立ち完了群 13 名であった。

Table 1 巣立ち段階における本人・長子・末子の年齢

群名	未巣立ち群		巣立ち始め群		巣立ち途中群		巣立ち完了群	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
本人年齢	50.24	4.35	52.39	5.58	53.86	4.64	55.80	3.69
長子年齢	23.27	4.08	26.16	4.42	28.71	4.13	28.36	3.54
末子年齢	19.40	3.88	22.24	4.13	24.57	4.00	26.00	3.01

(2) 巣立ち段階によるアイデンティティ変容の特徴

「多次元自我同一性尺度」について、逆転項目は得点を逆転し、各項目の粗点の合計を項目数で割った得点を多次元自我同一性得点とした。Figure 1 は、巣立ち段階による多次元自我同一性得点の平均を示したものである。欠損値を含んでいたため、未巣立ち群において 3 名、巣立ち感じ始め群において 1 名、計 4 名を分析から除外した。そのため、未巣立ち群は 43 名、巣立ち感じ始め群は 60 名、巣立ち途中群は 21 名、巣立ち完了群は 15 名であった。多次元自我同一性得点の平均は、未巣立ち群 99.44 ($SD = 19.05$)、巣立ち始め群 89.63 ($SD = 17.77$)、巣立ち途中群 102.38 ($SD = 15.81$)、巣立ち完了群 107.87 ($SD = 19.42$)であった。一元配置の分散分析を行ったところ、効果が認められた ($F(3,138) = 5.59, p < .01$)。多重比較として Tukey の HSD 法を用いたところ、巣立ち始め群よりも、巣立ち途中群と巣立ち完了群の方が、有意に高かった。

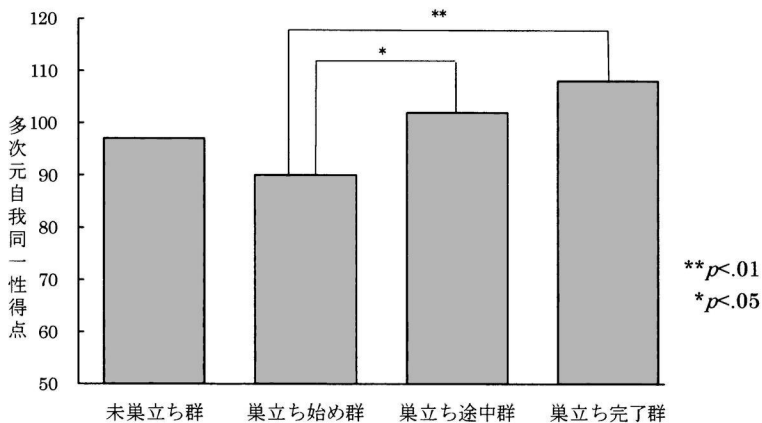


Figure 1. 巣立ち段階ごとの多次元自我同一性得点の平均

下位尺度に関しても同様に、それぞれの尺度について、自己斉一性・連続性得点、対自的同一性得点、対他的同一性得点、心理社会的同一性得点とした。まず、それぞれの下位尺度得点に関して

内的整合性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、十分な値が得られた(自己斉一性・連続性 $\alpha=.90$, 対自的同一性 $\alpha=.86$, 対他自的同一性 $\alpha=.84$, 心理社会的同一性 $\alpha=.85$)。

Figure 2は、巣立ち段階による自己斉一性・連続性得点の平均を示したものである。自己斉一性・連続性得点の平均は、未巣立ち群では27.64($SD = 6.19$), 巣立ち始め群では25.10($SD = 5.82$), 巣立ち途中群では29.19($SD = 3.91$), 巣立ち完了群では29.27($SD = 5.80$)であった。一元配置の分散分析を行ったところ、効果が認められた($F(3,140) = 4.26, p < .01$)。多重比較としてTukeyのHSD法を用いたところ、巣立ち始め群よりも巣立ち途中群の方が有意に高かった($p < .05$)。また、巣立ち始め群よりも巣立ち完了群の方が、有意傾向であるが高かった($p < .10$)。

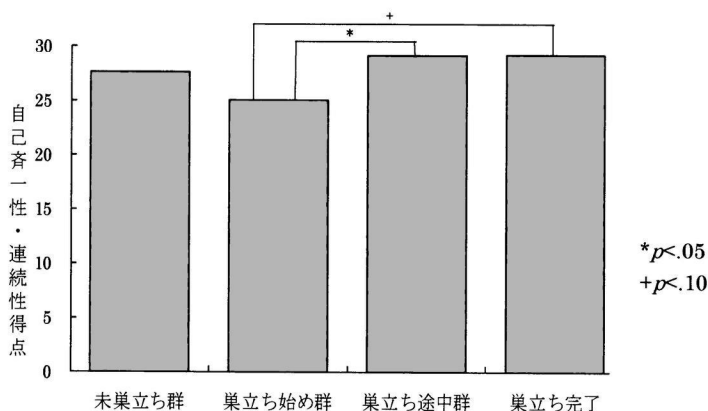


Figure 2. 巣立ち段階による自己斉一性・連続性得点の平均

Figure 3は、巣立ち段階による対自的同一性得点の平均を示したものである。対自的同一性得点の平均は、未巣立ち群では24.41($SD = 5.26$), 巣立ち始め群では21.98($SD = 5.48$), 巣立ち途中群では25.10($SD = 5.25$), 巣立ち完了群では26.73($SD = 5.74$)であった。一元配置の分散分析を行ったところ、効果が認められた($F(3,139) = 4.30, p < .01$)。多重比較としてTukeyのHSD法を用いたところ、巣立ち始め群よりも巣立ち完了群の方が有意に高かった。

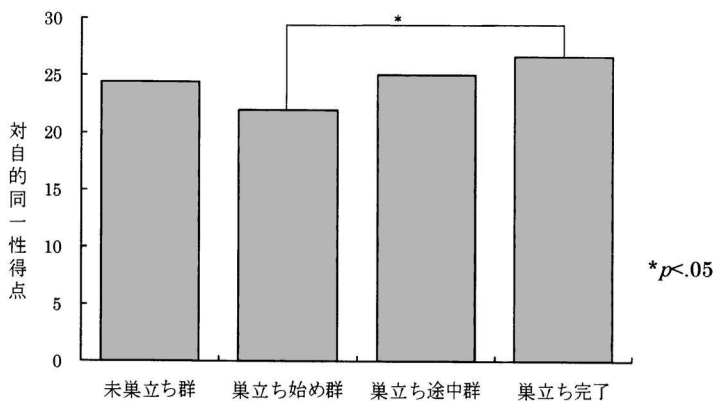


Figure 3. 巣立ち段階による対自的同一性得点の平均

Figure 4 は、巣立ち段階による対他的同一性得点の平均を示したものである。対他的同一性得点の平均は、未巣立ち群では 22.62($SD=4.86$)、巣立ち始め群では 21.26($SD=4.87$)、巣立ち途中群では 25.00($SD=5.36$)、巣立ち完了群では 26.13($SD=5.26$)であった。一元配置の分散分析を行ったところ、効果が認められた($F(3,141)=4.56, p<.01$)。多重比較として Tukey の HSD 法を用いたところ、巣立ち始め群よりも、巣立ち途中群と巣立ち完了群の方が有意に高かった。

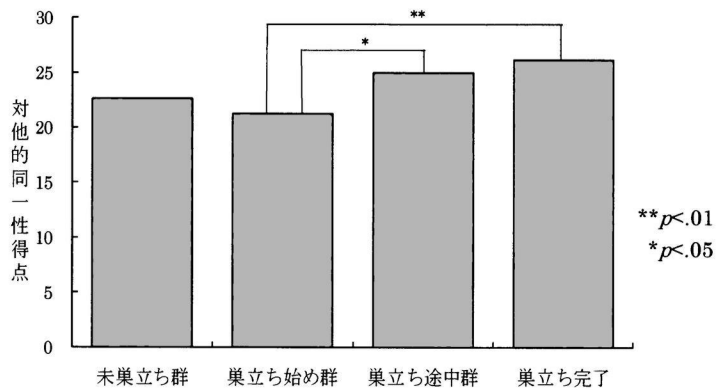


Figure 4. 巣立ち段階による対他的同一性得点の平均

Figure 5 は、巣立ち段階による心理社会的同一性得点の平均を示したものである。心理社会的同一性得点の平均は、未巣立ち群では 22.69($SD=5.23$)、巣立ち始め群では 21.57($SD=4.59$)、巣立ち途中群では 23.10($SD=4.10$)、巣立ち完了群では 25.73($SD=4.64$)であった。一元配置の分散分析を行ったところ、効果が認められた($F(3,140)=3.20, p<.05$)。多重比較として Tukey の HSD 法を用いたところ、巣立ち始め群のよりも巣立ち完了群の方が有意に高かった。

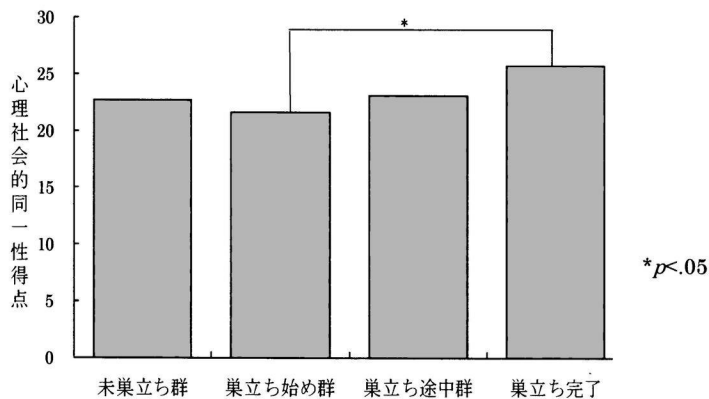


Figure 5. 巣立ち段階による心理社会的同一性得点の平均

(3) 子どもの客観的自立の程度とアイデンティティとの関連

子ども客観的自立の程度に関する指標としての子どもと同居しているかどうかや、子どもが就職しているかどうかということと多次元自我同一性得点との関連について分析した。Table 2 と Table 3 は、長子・末子それぞれの同居の有無，就職の有無による多次元自我同一性得点の平均について示したものである。

Table 2 同居の有無による多次元自我同一性得点の平均

	長子		末子	
	同居している	同居していない	同居している	同居していない
多次元自我同一性得点	93.67	96.89	96.46	96.55

Table 3 就職の有無による多次元自我同一性得点の平均

	長子		末子	
	就職している	就職していない	就職している	就職していない
多次元自我同一性得点	95.20	97.39	95.69	97.24

同居の有無と就職の有無について、長子・末子それぞれの多次元自我同一性得点について t 検定を行ったところ、有意な差は認められなかった。

4. 考察

研究 I では、子の巣立ち段階によるアイデンティティ変容の特徴を数量的尺度を用いて明らかにすることを目的としていた。

子の巣立ち段階による、多次元自我同一性得点の違いをみたところ、巣立ち始め群が巣立ち途中群と巣立ち完了群よりも有意に得点が低かった。子どもの自立を母親が主観的に認識することによってアイデンティティの問い直しが生じ、その主観的認識の進行に伴い、より高いアイデンティティ・ステータスに至るとしている清水(2004)と同様の結果が得られた。現代のポスト子育て期の女性は必ずしも“空の巣症候群(Deykins,1966)”のように、子の巣立ちに伴いアイデンティティが拡散するという経験はしないことが明らかとなった。また、アイデンティティ変容が生じるのは、巣立ち始め群から巣立ち途中群への移行途中であるということが示された。巣立ち始め群というのは、子どもの巣立ちに対して「最近そう思う」と答えている者であり、巣立ち途中群というのは、1人が巣立ちたと「ずっと前からそう思う」と答えている者である。つまり、巣立ちを感じ始めてから、巣立ちが1人完了したとを感じるまでの間にアイデンティティが変容するということができよう。これまでは、子どもが巣立つことによって、空の巣の中ではじめて自分自身を問い直すという結果が報告されていたのに対し(Deykins,1966; 千丈,2002)、今回の結果では、1人巣立ちが完了したとを感じるまでの間にアイデンティティが変容しており、現代の中年期女性にとって、アイデンティティ変容の転機となるのは、子どもの巣立ちを感じ始めることであり、比較的早い段階からアイデンティティの問い直しが起こっていると考えられる。しかし、母親がどのように巣立ちを感じ、どのよ

うにアイデンティティを問い直していくのかということ、研究Ⅰのデータからは明らかではないため、研究Ⅱにおいてさらに詳細に検討していくこととする。

多次元自我同一性得点の下位尺度に関して、自己斉一性・連続性得点、対自的同一性得点、対他的同一性得点、心理社会的同一性得点それぞれについて巣立ち段階ごとの得点比較を行った。斉一性・連続性得点と対他的同一性得点においては、巣立ち始め群よりも、巣立ち途中群、巣立ち完了群の方が高い得点であった。対自的同一性得点と心理社会的同一性得点においては、巣立ち始め群より巣立ち完了群の方が高い得点であった。したがって、子の巣立ち過程において、まず自己斉一性・連続性と対他的同一性に変容が生じ、次に対自的同一性と心理社会的同一性に変容が生じるということがいえよう。子の巣立ちに対するアイデンティティの変容は、母親から自分へという役割変容の中で起こる。そのため、母親役割の終了に伴い、まず、これまで持っていた母親としての自己の斉一性と連続性が保たれなくなり、同時に、他者から認識されている母親としての自己は、本来の自己の一部分であるという気づきの出現によって、斉一性・連続性、対他的同一性という部分のアイデンティティの問い直しが生じるのであろう。その後、自分は残りの人生において何を望むのかということ、社会の中で存在する自己として問い直すのではないかと考えられる。

また、子どもの巣立ちに関する客観的指標としての、長子、末子それぞれにおける同居の有無や就職の有無と多次元自我同一性得点との違いをみたところ、全ての分析において有意な差は認められなかった。このことから、子どもの客観的な自立の程度ではなく、母親が子の巣立ちを主観的に認識することによって、母親のアイデンティティに変容が起こるという清水(2004)と同様の結果が得られたといえる。

研究Ⅱ

1. 目的

研究Ⅰでは、母親の主観的な子の巣立ちの認識の程度によって、巣立ち段階を分類し、アイデンティティ変容の特徴を量的に明らかにした。研究Ⅱでは、子の巣立ちによるアイデンティティの変容プロセスを半構造化面接によって質的に明らかにすることを目的とする。さらに、子の巣立ちに対して感じる空虚感の違いによって、そのプロセスに違いがあるのか、また、空虚感に影響する要因は何かを検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者

研究Ⅰの調査対象者のうち、面接調査への協力を承諾してくださった方 13 名。平均年齢 51.30 歳($SD = 1.56$)であった。以下事例を A~M と表記する。

(2) 調査時期

2007 年 7~11 月。

(3) 手続き

個別の半構造化面接を行った。面接調査を実施するにあたり、広島大学教育学研究科倫理審査委員会の承諾を得ている。面接調査を行う前に、本研究の目的、録音、結果の公表について説明を行

い、面接承諾書に署名を得た。面接回数は各対象者につき 1~2 回、面接所要時間は約 60~120 分であった。面接の場所は、対象者の希望に基づき、対象者の自宅や職場、対象者の居住地近くの飲食店で行った。面接内容は全て調査対象者承諾の上、IC レコーダーおよび筆記による記録を行った。

面接の質問項目は以下の通りである(Table 4)。対象者の自発的な語りを尊重し、あらかじめ設定した調査項目で、足りないと思われる項目について適宜質問を行った。

Table 4 調査内容の質問項目

①子の巣立ちによる喪失感の有無・子育てのふりかえり

子育て中の苦労は何か
当時どのような思いであったか
今そのことをどう感じているか
子の巣立ちにより喪失感や空虚感を感じたのか
感じたならばそれはどのようなものであったか
何をきっかけにそう感じるようになったか
それによって、自分自身変化はあったか(自己の問い直しはあったか)
自分にとって子育てとはどのようなものであったか
子育て中に、母親としての自分と個としての自分の間で葛藤はあったか
どのように折り合いをつけていたか、つけられていなかったか

②いつ、どのように自己を問い直し、自己の模索をしているのか

今後どのように生きていくか考え直すことはあったか(自己の問い直しの有無)
あったならば、それはどのようなことがきっかけであったか
どのような問い直しが起こったのか
その問い直しに対して、どのような模索を行ったか
どのくらい主体的に模索を行っているか
どのくらい積極的にそれに関与しようとしているか
今どのような仕事・活動をしているか
なぜそれを始めたのか
自分にとっての仕事・活動の意味は
残りの人生をどのように生きていこうと考えているか

(4) 分析方法

KJ法(川喜田, 1967, 1970)による質的分析法を参考に、以下の手順により語られた内容を分析した。

- ①対象者ごとに語られた内容を全て逐語記録にし、記録内容について時系列に沿った要約を行った。
- ②逐語記録を意味のまとまりごとに 150 から 200 のエピソードに細かく区切ってカード化し、類似した内容をグルーピングし、内容を濃縮した見出しを付けた。
- ③カードを小グループから中・大グループへと徐々に編成していった。
- ④各グループを時系列に沿って整理をした。

以上の手続きに従って、個人のデータを分析し、子育てから子の巣立ち、現在に至るプロセスと特性を検討した。次に、それらを総合して分析・考察した。

3. 結果と考察

(1) 対象者のプロフィール

調査対象者のプロフィールを Table 5 にまとめた。

Table 5 面接対象者のプロフィール

	年齢	長子年齢	末子年齢	EN得点* ¹	ID得点* ²	巣立ち段階	最も積極的に 取り組んでいる活動
A	50	25(同居)	21(別居)	低群	111	未巣立ち	ボランティア
B	49	27(同居)	19(別居)	低群	78	未巣立ち	家事
C	53	23(別居)	20(同居)	低群	104	巣立ち始め	ボランティア
D	50	24(別居)	21(別居)	低群	105	巣立ち始め	フルタイム
E	49	24(別居)	22(同居)	低群	107	巣立ち始め	趣味
F	49	24(同居)	20(別居)	低群	96	巣立ち途中	ボランティア
G	52	27(別居)	24(別居)	低群	114	巣立ち途中	家事
H	54	25(別居)	19(別居)	低群	101	巣立ち完了	ボランティア
I	51	23(別居)	12(同居)	高群	109	未巣立ち	家事
J	52	21(別居)	—	高群	88	未巣立ち	パート・アルバイト
K	52	25(同居)	22(別居)	高群	90	巣立ち始め	ボランティア
L	52	25(同居)	20(別居)	高群	89	巣立ち始め	趣味
M	52	26(別居)	21(別居)	高群	103	巣立ち途中	ボランティア
平均	51.15	24.67	20.00		99.62		
SD	1.56	1.60	2.78		9.86		

*¹ 空虚感得点 *² 多次元自我同一性得点

(2) 子の巣立ちによるアイデンティティ再体制化プロセスに関するカテゴリ化

子の巣立ちによるアイデンティティ再体制化プロセスに関するカテゴリ化を行った。分析の結果、「とまどい」「納得」「信頼感の芽生え」「子どもの成長の実感」「巣立ちの予感」「空虚」「依存」「安堵」「自己の問い直し」「模索」「積極的関与」「アイデンティティ再体制化の完了」の12個のカテゴリが抽出された。また、客観的事実として「子育て中の問題」「問題克服」「子の巣立ち」の3種の内容が含まれていた。以下、それぞれのカテゴリに関する語りが見られた者を()内に示すこととする(例:「とまどい(B)」)。Table 6は、カテゴリとその特徴、語りの例を示したものである。

カテゴリ抽出の信頼性を検討するため、臨床心理学を専攻する大学院生2名(うち1名は筆者)によって独立に評定を行った。その結果、評定者間一致率は77.08%であり、一致しない項目については、評定者間で協議の上決定した。

Table 6 アイデンティティ再体制化プロセスにおけるカテゴリとその特徴、発言例

段階	特徴(下位カテゴリ)	発言例
子育て中の問題 (A,B,C,D,E,F,G,H,I,J,K,L,M)	子育てにおいて苦労した問題を乗り越えていくエピソード	「上の子がいじめにあって(B)」 「拒食症になってね。上も下も入院して(G)」
とまどい (B,C,D,E,G,H,J)	子どもの問題がどうして起こったか理解できずにショックを受けていたり、世間体からはずかしいと感じていたりしている状態	「このまま学校に行かなくなるんじゃないかって最初は不安だったのね(H)」 「いじめられてるのがはずかしいみたいない意識があって(B)」
納得 (B,C,D,E,F,G,H)	子どもの問題を自分なりに意味づけることができている状態	「よく話を聞いてみると、よい子を演じすぎて、学校に行ったらどうしてもそういう風になるから、行かない方がいいって。それが本音なのかなって思ったから、無理に行ってもしょうがないって思って(D)」
信頼感の芽生え (C,D,H)	子どもの問題について納得ができたことにより、子どもへの見方が変化したし、この子なら大丈夫だと感じられるようになっていく状態	「子どものことが理解できてからは、あんまり腹が立たなくなって、楽に見えるようになった。(C)」 「何かを見つければ動き出すんだろうなって。その気になればするって思った(H)」
問題克服 (A,B,D,E,F,G,H,J,M)	子育て中の問題を子どもや母親自身が克服し、それによって起こった変化のエピソード	「子どもが大きくなってからは、行動が広がって、葛藤はなくなりましたね(M)」
子どもの成長の実感 (J,K)	子どもの成長を実感している状態	「1 つずつハードルを越えていって、自分の中で自信がついてきたんですね(J)」
巣立ちの予感 (I,K,M)	子どもが自分のもとを離れ、いずれ巣立っていく日が来るということを感じ始めている状態	「子育ては終わるものっていうのは育てながら思っていて(I)」
空虚 (B,C,E,G,I,L,M)	子どもが成長し、巣立っていくことに対し空虚感を感じていたり、子どもの成長や巣立ちを認められず否認している状態	「時々ふっとさびしいかなと思うことはある(C)」 「いつも手近にあったものがなくなってしまったっていう喪失感。さびしいって(L)」
安堵 (B,C,D,E,G,H,J,K,L,M)	子どもが巣立ったことに対して自分の役目は終わったとほっとしている状態	「今まで1人で家にこもって、1人になったときどうするんだろうって思ってたけど、家族ができて、守ってくれる人ができてよかった(D)」
依存 (A,F)	子どもの巣立ちを感じられず、親離れもしくは子離れができていない状態	「まだ子どもが自立してなくて、親にべったりの状態だから、巣立ったっていう感じがしないのかもしれない(A)」
子の巣立ち (B,C,D,E,G,H,I,J,K,L,M)	子どもが巣立ったエピソード	「4月から初めて全員がいなくなりました。去年まで必ず誰かいて途切れることがなかったのに(M)」
自己の問い直し (A,C,E,G,I,J,K,L,M)	自己への対峙が起こり、自分らしい生き方の問い直しが起こっている状態	「Aちゃんのお母さんとしか呼ばれなくなって、Aちゃんのお母さんのまま終わってもいいのかなって思いました(A)」
模索 (A,C,E,G,I,J,K,L,M)	自分らしい生き方を探している状態	「夢を見つけないって。今探し中というところですかね(L)」
積極的関与 (A,C,D,E,F,H,M)	自分らしい生き方や生きがいに対して、社会の中で積極的に関与している状態	「ずっと主婦でいたから、仕事をして、何かを学ぶということが楽しかった(E)」
アイデンティティ再体制化の完了 (D,H,M)	子の巣立ちの作業が完了し、積極的に関与する対象も獲得している状態	「子どものことからボランティアを始めて、いろんなことがつながっていると感じる。これからも今までと同じようにいろいろやりながら、どんどん広げていきたいと思います(H)」

「子育ての問題」は、対象者ごとに様々な内容が語られた。子育てにおける自分自身の問題として、「閉塞した子育て」「夫の協力のなさ」「社会との隔絶」があった。子どもの問題としては、「登園しぶり」「いじめ」「不登校」「拒食症」「進路に関する意見の相違」「理解のできなさ」「精神的不安定(家庭内暴力)」「大病を患う」があった。子育ての中で、「特に困ったことはない」と答えた者は3名であった(I, K, L)。本研究の対象者の特徴として、子どもの問題の重篤度が高い者が多いことが挙げられる。重篤度の高い問題として、「いじめ(B)」「大病を患う(B)」「不登校(D, F, G, H)」「精神的不安定(家庭内暴力)(E)」「拒食症(G)」があり、対象者13名中6名がこのような問題を抱えていた。

「とまどい」は、子どもの問題がどうして起こったか理解できずにショックを受けていたり、世間体からはずかしいと感じていたりしている状態である(B, C, D, E, G, H, J)。「納得」は、子どもの問題を自分なりに意味づけることができている状態である(B, C, D, E, F, G, H)。問題克服へ向かう中で、「とまどい」と「納得」の状態が繰り返されている対象者がいた(D, H)。自分なりに子どもの問題に対して意味づけをし、納得しようとするが、それでも、いらだちや困惑が再燃する。「とまどい」を感じては、自分なりに「納得」することで、問題の克服へ向けて、子どもを見守り続けることができるのであろう。

「信頼感の芽生え」とは、子どもの問題について「納得」が進み、子ども自身の問題克服が進んでくる中で、子どもへの信頼感が芽生えてきている状態である(C, D, H)。「問題克服」は、「子育て中の問題」として挙げられていたものを、子どもや母親自身が克服したということが語られたものである(A, B, D, E, F, G, H, J, M)。「子どもの成長の実感」とは、子どもの成長を実感している状態である(J, K)。「巣立ちの予感」とは、子どもが自分のもとを離れ、いずれ巣立っていく日が来るということを感じ始めている状態である(I, K, M)。「空虚」とは、子どもが成長し、巣立っていくことに対し、空虚感を抱いている状態である(B, C, E, G, I, L, M)。「安堵」とは、子どもが巣立ったことに対して、自分の役目は終わったとほっとしている状態である(B, C, D, E, G, H, J, K, L, M)。「依存」とは、子どもの巣立ちを感じられず、親離れもしくは子離れできていない状態である(A, F)。「子の巣立ち」とは、実際に子どもが巣立ったという内容の語りである(B, C, D, E, G, H, I, J, K, L, M)。「依存」状態であったAさん、Fさん以外の全ての対象者において、「子の巣立ち」に関するエピソードが語られた。

「自己の問い直し」とは、自己への対峙が起こり、自分らしい生き方の問い直しが起こっている状態である(A, C, E, G, I, J, K, L, M)。「自己の問い直し」には、残りの人生をどう生きていくかという問い直し(発言例:「子どもが大きくなって、私1人で家にいる時間が長くなってきて、このまま私ずっと家にいるのかな、そんな私どうなのかなって。(E)」)や、子どもとのかかわり方に関する問い直し(発言例:「子ども自身が生きていく世界と私とのかかわりが深いと、彼の人生に影響を与えようだから、ちょっとずつついていかないとと思い始めた(C)」)、子育て中の反省からの自分自身の問い直し(発言例:「子どもの話を全然聞いてないな、子どもの気持ちわかってないなって思って。なんとかしないと。思って。(I)」)がみられた。「模索」とは、「自己の問い直し」に対して以後の人生をどのように方向付けるか、自分らしい生き方を見出そうとしている状態である(A, C, E, G, I, K, L, M)。「積極的関与」と

は、「模索」により見出した自分らしい生き方や、すでに獲得していた自己投入できる対象に対して積極的に関与している状態である(A, C, D, E, F, H, M)。「アイデンティティ再体制化の完了」とは、子育て中の問題が解決し、子の巣立ちが完了した上で、自己投入できる対象を見出し、それに積極的に関与することができている状態である(D, H, M)。

(3) 空虚感に関連する要因の分析

子の巣立ちプロセスと同様の分析によって、「空虚」から「安堵」へと空虚感を低減させる、もしくは空虚感を感じさせない要因について分析した。その結果、「つながりの実感」「自立の実感」「忙しさ」「わりきり」の4要因が抽出された。Table 7は、4要因とその特徴、語りの例を示したものである。

また、要因抽出の信頼性を検討するため、臨床心理学を専攻する大学生2名（うち1名は筆者）によって独立に評定を行った。その結果、評定者間一致率は94.12%であり、一致しない項目については、評定者間で協議の上、決定した。

Table 7 空虚感に関連する要因

空虚感に関連する要因	特徴	発言例
つながりの実感 (C,D,L)	離れたからといって、つながりが切れたわけではなく、互いに思いあっているというつながりを感じることができている	「ぶつ切り離れたわけじゃないし。精神的なつながりがあるから(D)」
忙しさ (D,L)	他にすることがあるために、子の巣立ちという喪失体験に浸ってられない	「下の子もいるので、こっちはこっちの生活があるから、気がまぎれたっていうのがあったかな(L)」
自立の実感 (H,I,L)	子どもなりに自立した生活をする事ができていると実感をもつことができている	「やっていけるやん、偉いやんって。親と離れてもやっていけるんだなって(L)」
わりきり (B,D,F,G,L,M)	心配しても仕方ない、子どもが自分なりに生活しようとしているなら、それを尊重しなければならぬと、自分と子どもとをわりきって考えようとしている	「知らぬが仏で、見えてないだけかもしれないけど、それを心配してもしょうがないかなって(M)」

「つながりの実感」とは、離れたからといって、つながりが切れたわけではなく、互いに思いあっているというつながりを感じることが空虚感に影響するというものである(C, D, L)。「ぶつ切り離れたわけじゃない(D)」という精神的なつながりの語りと、「携帯電話ですぐ話せたから安心できた(L)」というような実際に声を聞くことができるというつながりの語りとがみられた。「忙しさ」とは、仕事や別の子どもの面倒をみるなど、他にすることがあるために、喪失体験に浸ってられないというものである(D, L)。「自立の実感」とは、子どもなりに自立した生活ができているということを実感することが空虚感に影響するというものである(H, I, L)。「わりきり」とは、心配しても仕方ないと自分と子どもとをわりきって考えることが空虚感に影響するというものである(B, D, F, G, L, M)。考えないようにしよう、心配しても仕方ないと、不安や心配に焦点をあてないようにしている語り、自立しようとしているのだから邪魔はしないようにしないといけないとい

うように自分自身に子どもの自立を尊重するように言い聞かせている語りとがみられた。

(4) 子の巣立ちによるアイデンティティ再体制化のプロセス

(2)で抽出されたカテゴリを時系列に並べ、子の巣立ちによるアイデンティティ再体制化のプロセスとして図式化したものを Figure 6 に示した。

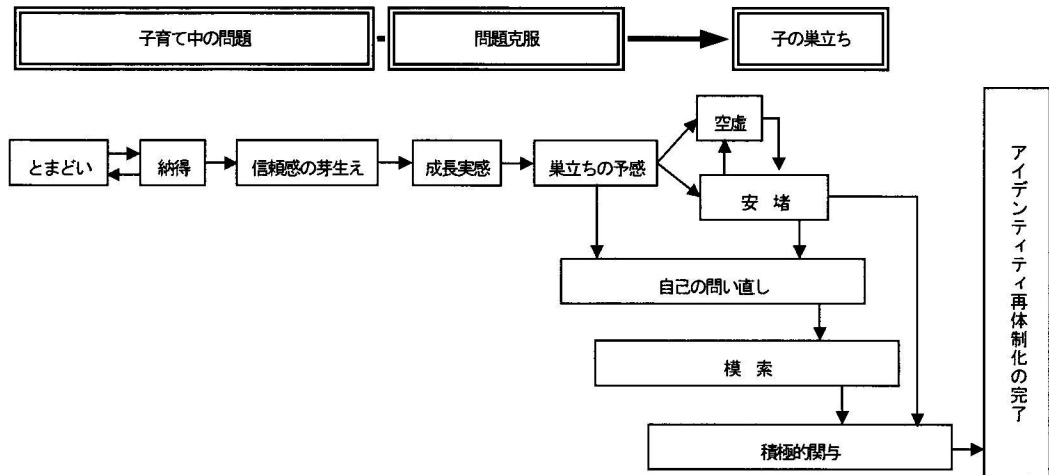


Figure 6. 子の巣立ちによるアイデンティティ再体制化のプロセス

子どもの巣立ちによるアイデンティティ再体制化は、次のようなプロセスがみられた。まず、子育て中の問題を乗り越える中で、「とまどい」と「納得」を繰り返し、子育てにおける問題について自分なりに意味づけができるようになる。そうすることにより、長い目で見守ろう、この子なら大丈夫という、子どもへの「信頼感の芽生え」の状態に至る。そして、現実的に子どもが問題を乗り越えたり、自分自身が問題を乗り越えたりする中で、「子どもの成長実感」の段階に至る。子どもの成長を実感することが、いつかは子どもたちは自分の元を巣立っていくという「巣立ちの予感」へとつながる。そして、「巣立ちの予感」から、巣立ち後を考えて不安が高まる「空虚」状態、もしくは子どもが巣立つことに対してほっとしている「安堵」状態に至る。一方で、「巣立ちの予感」によって、これからの自身の生き方を考え直す「自己の問い直し」に直接つながることもある。さらに、実際に子どもが巣立つことにより、「空虚」から「安堵」へ、「安堵」から「空虚」へと移行しながら、「自己の問い直し」が起こり、それに続いて「模索」、「積極的関与」状態へと至る。子の巣立ちが完了し、「自己の問い直し」、「模索」、「積極的関与」を経ることにより、アイデンティティ再体制化が完了する。

先述した 12 カテゴリの中には「依存」が含まれていたが、今回プロセスを図式化する上で、「依存」は除外した。これは、今回の調査で「依存」状態であった A さんと F さんは、巣立ちの途中段階であり、この後どのようなプロセスをたどっていくか予測することしかできないためである。母親役割に執着し、子どもの自立を阻むことは、母親自身が不安定になることにもつながり、アイ

デンティティの混乱要因になるということがこれまでも言われてきている(千丈, 2002; 清水, 2004)。今回のケースは、A さんも F さんも積極的に関与できる対象を獲得しており、母親役割に執着しているわけではないが、親子共に自立できない「依存」状態に陥っている。今回の調査では、十分検討することができなかつたため、今後、このようなケースについての詳細な検討が必要であると考えられる。

(5) 空虚感の程度によるアイデンティティ再体制化プロセスの相違に関する分析

研究 I で調査した空虚感項目の低群と高群によって子の巣立ちプロセスに相違があるかを分析した。空虚感低群 8 名(A~H)、空虚感高群 5 名(I~M)であった。Figure 7, Figure 8 は、それぞれ空虚感低群と空虚感高群の子の巣立ちによるアイデンティティ再体制化のプロセスを示したものである。

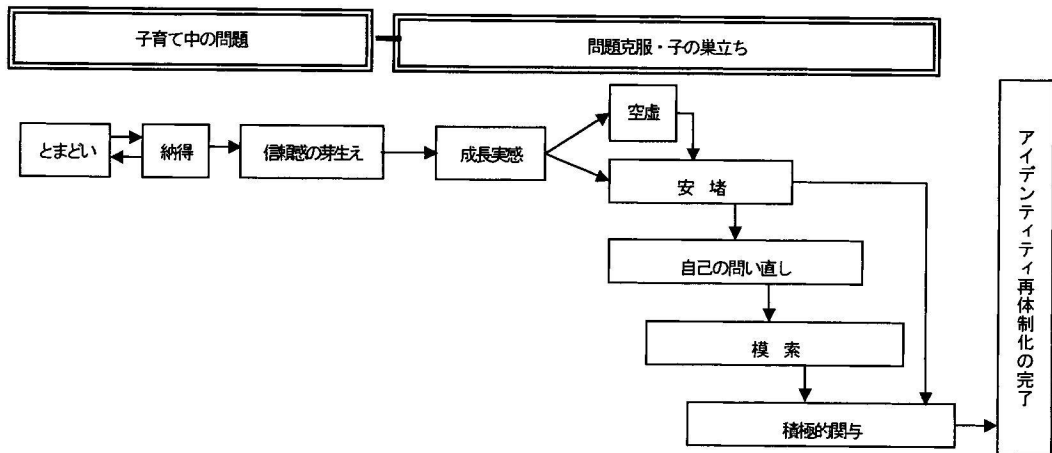


Figure 7. 空虚感低群の子の巣立ちによるアイデンティティ再体制化のプロセス

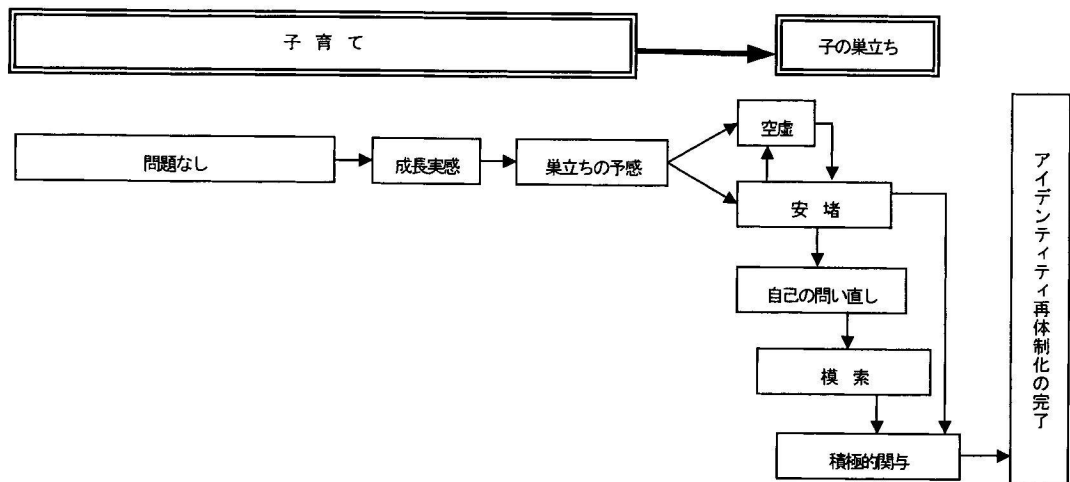


Figure 8. 空虚感高群の子の巣立ちによるアイデンティティ再体制化のプロセス

本研究の対象者には、先述した通り、子育て中の問題を抱えていた者が多く、重篤度が高いものは13名中6名みられた。この6名全員が空虚感低群であった。それに対し、「特に困ったことはない」と答えた3名はすべて空虚感高群であった。また、空虚感高群において子育て中の問題を語った2名は、「登園しぶり(J)」と「子育て初期の閉塞感(M)」であり、両者ともに比較的早期に問題は解決していた。したがって、子育て中に抱えていた問題の重篤度が子の巣立ちに対する空虚感の感じ方に影響を及ぼすということが本研究から明らかとなった。

これは、岡本(1985)の述べる、中年期のアイデンティティ再体制化のプロセスにおける危機体験の違いが影響していると考えられる。すなわち、低群では子育て中の問題が危機となり再体制化が進むのに対し、高群では子の巣立ちが危機となり再体制化が進むのではないだろうか。子の巣立ちの作業とは、言い換えれば母子分離の作業である。子は親からの分離—個体化をすすめて、アイデンティティの確立を進めていく。それと同時に親も離れをし、アイデンティティを再体制化していく。この母子分離の時期が、空虚感高群と空虚感低群では異なっているのである。空虚感低群では、子どもが問題を乗り越えていく中で母子分離の作業を進めていく。そのため、物理的な巣立ち段階では心理的な巣立ちはずでに完了しているため、スムーズに巣立ちが進行すると考えられる。一方、子育てにおける問題を感じてこなかった母親の場合、心理的な巣立ちと物理的な巣立ちが同時に起こり、母子分離の作業を子の巣立ち段階で行うため、巣立ち段階での空虚感が高くなるのであろう。

このような危機の違い、母子分離の時期の違いが影響するため、空虚感低群では「巣立ちの予感」を感じる事ができない。空虚感低群は「問題克服」と「子の巣立ち」が同時に起こることが多い(E, F, G, H)。そのため、巣立ちの予感を感じる事のないまま子どもが巣立っていく。それに対して、空虚感高群では、「巣立ちの予感」が引き金となり、巣立ち前に「空虚」段階に至る。また、空虚感低群は、空虚さを感じても「安堵」への移行がスムーズである。これは、先述したとおり、巣立つ前に母子分離の作業をしているため、危機が比較的軽度のものとなると考えられる。

総合考察

本研究では、ポスト子育て期の女性のアイデンティティ再体制化プロセスを検討することを目的とした。そのため、研究Ⅰでは、数量的尺度を用いて子の巣立ちに伴うアイデンティティ変容の特徴を把握し、研究Ⅱでは、半構造化面接によって子の巣立ちに伴うアイデンティティの質的変容のプロセスを分析した。

研究Ⅰにおける、子の巣立ちに伴うアイデンティティ得点の変化の特徴から、後山(2002)の指摘同様、Deykins(1966)の提唱した“空の巣症候群”は一般的にあてはまるものではないということが示された。しかし、清水(2004)の結果と同様に、子の巣立ちがアイデンティティ変容の転機となることは明らかとなった。また研究Ⅱから、子の巣立ち後に危機が訪れるのではなく、子どもの成長を実感する中で、実際に子どもが巣立つ前に子の巣立ちを予感し、自己の問い直しが起こっていることが示唆された。比較的早い段階から、子の巣立ちを意識し、自分らしい生き方の模索を始めているということがいえよう。自己の問い直しに関しては、研究Ⅰにおける谷(2001)の多次元自我同一

性尺度から多次的に検討したところ、まず、子の巣立ちという母親役割の終了に伴い、自己の斉一性や連続性に関するアイデンティティや、他者から見られている自分と本当の自分との一致度に関するアイデンティティを問い直し、その後、残りの人生を社会の中でどう生きていくかというアイデンティティを問い直す。つまり、母親役割の終了により、改めて自分とは何かという根本的な自己の問い直しが生じ、その後、自分らしく生きるためにはどうすればいいかという生き方の問い直し、それも、社会の中でどう生きるかという問い直しが起こるということが明らかとなった。

また、研究Ⅱから、子の巣立ちが危機となるかどうかは、岡本(1985)の述べる、中年期のアイデンティティ再体制化のプロセスにおける危機体験の違いが影響するということが示唆された。つまり、子育て中に抱えていた問題の重篤度が高いと、それが危機として体験され、子の巣立ちそのものが危機体験となることはないが、子育て中に特に問題を感じていない場合は、子の巣立ちが危機体験となる可能性が高い。これを、本研究では、母子分離作業の時期の違いであると考察した。子育て中に重篤な問題を抱えていた者は、その問題を乗り越える中で母子分離の作業を行う。そのため、子の巣立ちの際には、すでに母子分離が進んでいるため、大きな危機となることはない。一方、特に問題を感じていなかった者の場合、子の巣立ちの際に母子分離の作業を行うために、大きな危機となる可能性が高い。

最後に今後の課題として以下の三点が挙げられる。第一に、対象者の偏りがあったことである。研究Ⅰにおいては、巣立ち段階ごとの人数が統制されていなかった。研究Ⅱにおいても、13人中6人の対象者の子どもが、不登校や拒食症など、比較的重篤な心理的問題を抱えていた者であった。そのため、今回の調査で得られたプロセスを一般化することは難しいと考えられる。子育て中に特に問題を感じない上、空虚感も感じずに子の巣立ちを完了させる人も存在するはずである。今後、より一般化できるようなプロセスを検討するために、対象者を幅広く選択する必要がある。

第二に、研究Ⅱより、子育て中に子どもが心理的問題を抱えていた母親は、子の巣立ちのプロセスが一般的なそれとは異なる可能性が示唆された。よって、子どもが不登校や拒食症等の問題を乗り越える中で母親がどのような体験をしているかということに加えて、そのような体験をした母親が子の巣立ちをどのように体験するのか、より詳細に検討していくことが必要であろう。

第三に、今回の対象者の空虚感高群の者のように、自分自身の力で子育て後の危機を乗り越えていく人もいるが、危機が重篤で臨床問題を呈した女性にはカウンセリング等専門的援助が必要となることもある。このような心理臨床的援助に関する問題も今後の重要な課題である。

引用文献

- Deykins, E. Y. (1966). The empty nest : Psychosocial aspects of conflict between depressed women and grown children. *American Journal of Psychiatry*, **122**, 1422-1425.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society* New York : W.W. Norton.
- (エリクソン, E. H. 仁科弥生(訳) (1977). 幼児期と社会 みすず書房)

Flick, U. (1995). *Qualitative forschung* Hamburg : Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.

(フリック, U. 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子(訳) (2002). 質的研究入門—<人間の科学>のための方法論— 春秋社)

Gonzalez, P. C. (1990). Ego development and ego identity in mothers at mid-life. *Dissertation Abstracts International*, **51**, 2643

井上輝子 (1992). 女性学への招待—変わる／変わらない女の一生— 有斐閣選書

井上輝子・江原由美子 (2005). 女性のデータブック 第4版 有斐閣

入村知里 (2005). 中年期女性の喪失体験と抑うつに関する一研究 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集, **5**, 53,54.

石川実・山下美紀・大石美佳 (2000). 「エンプティ・ネスト」期自覚と「中年」期自覚に関する一研究 家族研究論叢, **6**, 13-38.

伊藤美奈子 (1999). 個人と社会という観点からみた成人期女性の発達 岡本祐子(編) 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房 pp.87-112.

桂 晶子・佐々木明子 (2006). 在宅介護終了後の家族介護者の達成感・満足感および空虚感と死別前要因との関連 宮城大学看護学部紀要, **9**, 1-9.

川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために— 中央公論社

川喜田二郎 (1970). 続・発想法—KJ法の展開と応用— 中央公論社

国眼真理子 (1999). 女性の職業意識の発達とアイデンティティ 岡本祐子(編) 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房 pp.113-142.

難波淳子 (2000). 中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察—語られたライフヒストリー—の分析から— 社会心理学研究, **15**, 164-177.

岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, **33**, 295-306.

岡本祐子(編著) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房

岡本祐子 (2005). 概説 中年の光と影 岡本祐子(編) 中年の光と影—うつを生きる 至文堂 pp.9-22.

千丈雅徳 (2002). 母親の空の巣症候群 教育と医学, **50**, 542-546.

清水紀子 (2004). 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ 発達心理学研究, **15**, 52-64.

杉村和美 (1995). ライフサイクル—男性と女性 南博文・やまだようこ(編) 講座生涯発達心理学 5: 老いることの意味—中年・老年期 金子書房 pp.117-152.

谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成— 教育心理学研究, **49**, 265-273.

徳田治子 (2004). ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ: 生涯発達の視点から 発達心理学研究, **15**, 13-26.

後山尚久 (2002). 成長した子供と母親との関係が女性の心身に与える影響—空の巣症候群— 女性心身医学, **7**, 192-197.

渡邊芳之 (2004). 質的研究における信頼性・妥当性のあり方 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウツタヤ(編) 質的心理学—創造的に活用するコツ— 新曜社 pp.59-64.

付記

本研究にご協力を賜りました皆様, また, データ分析にあたりご協力いただいた, 広島大学大学院教育学研究科 深瀬裕子さん, 小泉誠さんに心より感謝申し上げます。